

平成17・18年度
修徳学区

修徳学区 まちづくり憲章 第1部

平成18年3月

修徳自治連合会
修徳まちづくり委員会

目次

まちづくりへのご協力のお願い [修徳自治連合会 会長 平井常夫] …	2
『修徳学区まちづくり憲章』作成の目的 ……………	3
修徳学区の目指す姿 ……………	4
まちづくりのテーマ ……………	4
修徳学区の歴史 ……………	5
伝統ある修徳をまもっていきましょう ……………	7
人と人とのつながりを大事にする修徳でありつづけましょう ……………	8
賑わいのある修徳にしましょう ……………	9
自分たちの誇りにふさわしい町並みを増やしましょう ……………	10
修徳学区内の建築物の建て方のお願い ……………	11
『京のまちやな〜』とを感じる町並みを大切に! ……………	11
修徳学区民は次に示すような建築物の建て方を望んでいます ……………	12
こんな建て方がよいと思いませんか? [町家編] ……………	13
こんな建て方がよいと思いませんか? [町家改修・新築編] ……………	14
こんな建て方がよいと思いませんか? [マンション編] ……………	15
こんな建て方がよいと思いませんか? [企業ビル・店舗編] ……………	16
(資料 - I) 修徳学区の地区計画 ……………	18
(資料 - II) 修徳学区の位置と現状 ……………	20
修徳学区の位置 ……………	20
町並みの変化 ……………	21
修徳学区の現状 ……………	23
修徳学区の名所・旧跡 ……………	25
(資料 - III) 修徳自治連合会の事業活動の紹介 ……………	26

まちづくりへのご協力のお願い



修徳自治連合会 会長 平井 常夫

修徳学区民の皆さんが「この学区（まち）は住みつづけたいよいまち」で、「もっとよくしていきたい」とお考えになっていることは、今までの自治連合会の事業活動や行事に参加していただいている様子で、よく理解いたしております。仕事等其他のご事情で参加できない皆さんも、広報紙『脩徳』の記事で紙上体験をしていただいております。屋外の行事では洛央校区の親子もふくめ千人の集いとなり、屋内の行事や会合では百人の集いが定着して、修徳学区民の心の絆が、いかに強いものであるかを実感いたしております。

もともと、この修徳学区は近隣都市へのアクセスが便利で、学区内に商工業の賑わいもあり、生活意識のレベルも高いと自認してまいりました。毎日の生活物資の調達も学区内ででき、町並みも道路もきれいで、顔の見える絆の強いまちでした。

しかし、かげりも感じられます。最近賑わいが失われ、新しく建つマンションやビルのなかには、修徳の歴史や伝統にふさわしくない建物もあり、新しい住民の皆さんと顔が見える関係がなかなかつくれず、両側町の安心安全やモラルにも、少しばかり、かげりが見えてきました。放火、ひったくり、車上狙い、まちを汚すポイ捨て、子どもたちへの犯罪、高齢者への犯罪など学区の内外で不安はひしひしと感じてきています。

とはいえ、まだ、修徳学区では、町並みも決定的な違和感にまでは至っておりませんし、モラル面も犯罪面も不安感はあるものの地域のなかでは、ほとんど発生しておりません。今が最後の残された時間だと思えます。そこに、私が『修徳学区まちづくり憲章（第1部）』の策定を、まちづくり委員会に指示した理由があります。ほかにはないこの学区の歴史的な人脈と文化的史跡に誇りを持ち、町家を中心とした伝統に調和した町並みを京都の修徳らしく創りあげていきましょう。個人の住宅もビル、マンションも、高さや形や色が町並みになじみ、緑の多い顔の見える交流しやすい建物にしていこうという意思表示をしていただきたいと思います。来年度は『修徳学区まちづくり憲章（第2部）』の策定にかかります。住まいと環境の問題、防災防犯などの危機管理問題、健康弱者交通弱者対策、まちを美しくする道路設備対策やモラルの向上などを、学区民の皆さんに表明していただく内容にしたいと考えております。

『修徳学区民は、この学区（まち）を、こんな風によくしたいと思っています。』と、今のうちに学区の内外に宣言したいと考えています。ぜひ、ご自分のこととして、ご賛同とご協力を賜りたいとお願いする次第であります。

『修徳学区まちづくり憲章』作成の目的

わたくしたち修徳学区民は、修徳学区という地域（まち）の歴史と文化的史跡にまつわる人脈から、平安時代から鎌倉時代にかけて、京都の政治と文化の中心地であったことを誇りに思い、室町時代末期以来の「町と町組」の伝統を「町内会と自治連合会」の組織と活動に生かし、学区民同士の強い絆を形成しつづけていきたいと考えております。

わたくしたち修徳学区民は、まちの賑わいをつくる商工業を営む人たちと、周辺大都市へのアクセスの便利さから、京都市内とその周辺都市の企業に勤める経営者、勤労者で構成されており、物質的にも精神的にも高い水準をもつ「まち」であると自負してきました。また、住民同士の絆が強く、ひとへの思いやりも強いことから生活環境もよく、わたくしたち学区民は、地域に誇りをもち、長く住みつづけたいと思ってきました。それこそわたくしたちが修徳学区をきれいなまちにしてきた要因でもあります。

しかし、最近、その「きれいなまち」にも、心ない動きがみられるようになって、わたくしたち学区民は心配しはじめています。この「きれいなまち」のモラル面もさることながら、最近の町並みの乱れに注目すると、まちの賑わいが失われ廃業した商店や高齢化による町家の売却跡地が、空家のまま放置されたりガレージになっていたり、あるいは、伝統的な町並みや住民の気持ちに配慮のないビル、マンションが建設されてきた事例が多いことに原因があると考えられます。

また、マンションによる人口の増加は、別の賑わいをつくりだしているとはいえ、建物のあり方自体も、そこに住む人たちの間の絆を弱めてしまっているのではないのでしょうか。このような「まちの自治」の外に生活する人たちの増加で、わたくしたち修徳学区民との関係だけでなく、マンション住民の皆さん同士でも、顔を見えなくし、たがいの絆を弱める風潮を醸成してきているように思われます。これを克服するために、修徳学区民は「こうしたいと考えています」というのが、『まちづくり憲章』の内容なのです。

このような多くの要因が、健康、長寿、命を脅かすあらゆる生活上の課題をつくりだしているのではないのでしょうか。災害、公害、事故の発生から、一度しかない命と健康をまもるため、あらゆる事例を考えて防ぐことが危機管理の考え方の基本であり、自分たちが日常生活の全側面を点検し、安心安全を脅かす要因を見つけ出し、それを取り除いていかななくてはならないと自覚していきたいものです。

これが、『修徳学区まちづくり憲章』をつくる目的なのです。

修徳学区の目指す姿

まちづくりのテーマ

○歴史と由緒ある地域に誇りのもてるまち

他に誇れる由緒ある歴史的資産と、寺社とつながりの深い職や暮らしの文化など、地域がもつ個性、特徴を地域に住む人自身が知り、また学区外の人にも伝えていきましょう。

○地域の誇りとなるお祭りのあるまち

地域が一丸となってまもり育てていける祭事を修徳につくりましょう。

○自治の伝統をまもり、顔の見える絆の強いまち

新しくお住まいになる人に修徳のことを伝え、活動に参加いただき、ともに気持ちよく暮らしていけるまちをつくりましょう。

○商工業の店の多い、歩いて暮らせる賑わいのあるまち

かつての賑わいと活気あふれる修徳をもう一度つくっていきましょう。

○修徳学区が昔から大切にしてきたものと、今の暮らし方との調和に配慮した町並みがあるまち

今でも地域に見られる町家や、寺社、商店街など、地域のなかに様々にある風景を大切に、建築行為を行なうときはそれらに配慮した町並みをめざしましょう。

■修徳学区の歴史

誇るべき二つの「伝統の柱」

修徳学区という地域には、歴史的な政治と文化面での伝統と、町と町組の自治の伝統の、誇るべき二つの「伝統の柱」があります。

[1] 政治的文化的史跡と歴史的人脈

(1) 鎌倉初期の公家政治の改革者、関白九条兼実の人脈

修徳学区の東部には関白九条兼実の和歌の師であった藤原俊成の邸宅跡が、五条大路（現在の松原通）の烏丸小路から室町小路にかけてあり、南は樋口小路（現在の万寿寺通）にまで及んでいたといわれています。そのため俊成は五条三位と称されました。烏丸通松原下の俊成社は俊成の霊を祀っています。また、「俊成邸内に和歌山の玉津島神社の歌道の神、衣通郎姫を勧請せよ」と後鳥羽天皇の宣旨が下ります。それが松原通烏丸西入りの新玉津島神社です。そして、第7番目の勅撰集「千載和歌集」を撰進するよう後白河法皇の院宣が下り、俊成は自分の邸宅内（新玉津島神社から南へ室町までの部分）に「和歌所」を設置しました。それ以来、この「和歌所」の別当が、新玉津島神社の別当（神職）を兼任する慣習ができました。

そして、学区の西部には兼実の信仰の師であった法然の弟子で、兼実の弟の天台座主慈円の弟子でもあった親鸞が晩年を過ごし入滅した、兼実の花園別邸跡があります。現在の位置は、親鸞入滅の石碑がある松原通西洞院東入りの光圓寺から月見の池のあった万寿寺通東入りの大泉寺までの一帯であります。兼実の人脈でつながる修徳学区の東と西のこの地域は、鎌倉初期の政治文化の中心地だと確認することができます。

(2) 平安後期白川院政時代の大江匡房の千種殿と江家文庫

院政を支えた律令官僚の受領（現地着任する国司、現在の知事クラス）で文章家であった大江匡房は、美作守に任ぜられたとき、他の受領たちと同じく富をたくわえ、五条大路から六条坊門小路（現在の五条通）、西洞院大路から室町小路の広大な土地にあった具平親王の邸宅を手に入れ、その東北部分に江家文庫をつくり、万卷の書籍を蒐集しました。この邸宅は千種殿といわれ、この一帯を千草町といっておりました。ここも平安時代院政初期にも、政治と文化の中心地と確認することができます。

このような受領の蓄財に関わる史跡には、「江州五倉」といわれた近江守藤原隆時の倉庫群のひとつが五条大路東洞院大路（現在の東洞院松原）付近にありました。こういった受領たちの邸宅が五条大路に立ち並んだといえます。また、この受領層は、その子弟から紫式部や清少納言などを輩出し、当時の政治と文化の担い手でした。

(3) 祇園会由来の町と京都の城下町化による領主の京屋敷の存在

修徳学区には、室町時代以降に、祇園社の牛頭天王の八王子とその神社の創建に関わる石に由来する烏丸万寿寺付近の町など鉾町に由来する伝承のある町や鉾町の寄町があります。また、江戸時代には京都の城下町化で亀山藩や伊予藩の京屋敷があった伝承が一、二の町にみられます。

今後とも、通りや町の由来を調査研究して、学区の史跡や町の由緒を学区民の誇れる資産としていきたいものです。

[2] 町と町組の自治の伝統

(1) 戦国時代、織田信長に公認された自治組織

室町時代末期には、自衛のために存在した町と、その連合体である町組、さらに、下京に5つある町組のまとまりである惣町がありました。信長は、その町に警察権行刑権を公認し、町で処理できないときは、町組の惣町で補完せよとっています。戦国時代までは、町と町組の組織は五条大路（現在の松原通）までしかありませんでした。修徳学区の各町は、豊臣秀吉が西本願寺を寄進し、その寺内町が発展していく過程で町ができていき、巽組、川西9町組、川西16町組にわかれて所属していきます。通日も秀吉が六条坊門小路を「五条通」としたため、もとの五条大路は新玉津島神社の松林にちなんで、「松原通」となりました。江戸時代にも、この自治の伝統は継承されたのです。

(2) 明治維新の町組の一円化と修徳小学校の学区経営

明治維新になると、欧米列強に肩を並べる近代文明国になるには、教育がその基礎になければならないと、自治の伝統をもつ町と町組を活用し、町組を番組と名称を変え、さらに、一番組一小学校とし、小学校を中心に一円化しました。修徳学区は、当時第14番組といわれ、徳万町の北条太平衛さんがその敷地を寄付し、日本で最初に、第14番組小学校を建設し授業を始めました。後の総理大臣伊藤博文が来訪して、明治維新の改革と復古の精神を表した中国の『詩経』大雅篇文王章第6章の「脩厥徳」（その徳を修めよ）を扁額に書き、修徳小学校と命名してくれました。修徳小学校は、日本で最初に小学校会社を設立し、学区が小学校を経営していきました。この学区経営は、昭和17年、当時、国民学校と称していた小学校が、市立となり京都市に経営が移るまでつづきました。修徳学区民の誇りがここにもあり、小学校を核とする強い心の絆が育まれる基盤になりました。

(3) 洛央小学校への統合から「まちづくり」へ

戦後、民主主義教育になり、昭和22年に市立修徳小学校となってからも、昭和49年の修徳小学校のプール建設にみられるように、小学校への学区民の資金援助はつづきました。そして、昭和63年末に転機がまいります。洛央小学校への統合が決定し、修徳小学校の跡地を学区民の心の絆の核にふさわしい施設にするだけでなく、跡地問題を「平成の事業=修徳学区のまちづくり」に昇華させるため、まちづくりテーマ「社会教育プラザ 花と緑 健康と福祉の学区（まち）修徳」を掲げます。跡地を福祉施設とし、運動場跡に学区民みんなでデザインした修徳公園をつくって学区民の強い絆の核とし、学区の景観の中心に位置づけました。修徳学区の「まちづくり」の特徴は、勉強会、アンケート、ワークショップなど学区民の想いを確かめながら、それを文書に策定していき、共通認識を豊富にしていくことです。平成13年3月には、学区民の想いを集大成した『修徳学区の地区計画』を、京都市都市計画審議会が承認しました。そして、さらに『修徳学区の地区整備計画』を策定する前に、修徳学区の文化的史跡にふさわしい町並みや安心安全できれいな「まち」づくりの共通認識を学区外の関係者にも理解してもらうため、『地区計画』を更に詳細にし具体化した『修徳学区まちづくり憲章』を、このたび、策定いたしました。この『憲章』を基礎に、この学区（まち）を町衆の心意気で、住みつけたい、顔の見える、きれいな「まち」にしていきたいと思います。

■ 伝統ある修徳をまもっていきましょう

歴史と由緒ある地域に誇りのもてるまち 地域の誇りとなるお祭りのあるまち

修徳の歴史や伝承と文化的史跡や名所について地域の人に尋ねると、新玉津島神社、俊成社、大泉寺、光圓寺、悪王子社（現八坂神社内）、亀山稲荷、道祖神社など、地域の誇れる場所が数多く残っていることがわかります。また、それぞれ地名には由来があり、その由来から知ることのできる歴史はたいへん興味深いものです。しかし、残念なことに、これらの歴史や伝承、文化的史跡を知らない世代の人が地域に増えてきています。これらの地域の歴史的資産を伝える人がいない、伝える機会がない現状のままでは、修徳の歴史的資産を残していくことが困難になります。

また、かつての修徳はお祭りをはじめとし、様々な伝統行事がありましたが、今では地域のお祭りがなくなり、子どもの数が減るなかで地蔵盆も減っています。これらの伝統を地域の人に残したいと考えています。伝統ある修徳をまもっていききたいという地域の願いがあります。

伝統ある修徳をまもるために
次のことをやっていきましょう。

地蔵盆の保存

子どもを中心とした行事を地域の人々は楽しみにしています。地蔵盆をきっかけに地域のつながりを強めましょう。

お祭り（お神輿^{みこし}）をつくる

お祭りを開催すると、地域は活気にあふれます。加えて、地域みんなが望むお神輿をつくりましょう。

人が訪問したくなるまちづくり

地域の人はもちろん、地域の外からも人が訪れたいくなるような、魅力的なまちにしましょう。まず、地域の人が自ら楽しめるまちをつくりましょう。

地域の名所・旧跡を活用する

地域の誇りである名所・旧跡の魅力を、より多くの人に知ってもらいましょう。人を集められる魅力が修徳にはあります。それをうまく活用しましょう。

重点取組

まちづくりに勢いをつけるためにも、お祭りとお神輿をつくりましょう。

■人と人とのつながりを大事にする修徳でありつづけましょう

自治の伝統をまもり、顔の見える絆の強いまち

修徳はこれまで人と人とのつながりを大事にし、安心して生活をつづけるために必要な地域の活動をみんなで盛り立ててきた、まとまりのある仲のよいまちです。

立地場所は交通至便ですが、車の往来や人通りが多い通りとそうでない通りがあります。修徳には昔から人が沢山往来する街道があり、見知らぬ人も多いなかで安心して住むためには互いが顔見知りの関係になり、声を掛け合う、見まもりあうなどができるようにすることが何より重要だったのです。

それは今でも同じであり、住んでいる人のなかに新しく住民となる方が増えている現代では、昔以上に互いの関係づくりが難しくなり、地域の生活環境をまもりにくくなっています。

子どもやお年寄りが安心して生活でき、おたがいに、このまちをふるさと思いい、長く住みつづけていけるようにしたいものです。新しくこのまちに住む人たちにも、地域のことをよく知って地域の人たちと顔見知りの関係になって、いっしょに地域を盛り立てていただきたいと願っています。

人のおつきあいを大切に
いくために 次のことをやっ
ていきましょう。

マンションなどにお住まいの人との交流

マンションの建設時には交流のためのイベントなどを開催するなど、具体的なアクションを起こし、一人でも多くの人に仮想マンション町内会への参加を呼びかけましょう。

知り合いの多いまちづくり

誰もがあいさつしあい、顔見知りを増やしましょう。子どもの安全をまもるという視点から、人の目の届かないところが少ないまちを目指しましょう。

京都での暮らし方の伝承

京都での暮らし方を知らない新しい住民にはパンフレットを配布するなど、知らないことで生じる誤解を防ぐようにしましょう。

地域とのつながりを重視する建物づくり

住宅であれば表札を表示し、マンションであっても地域と共有の施設を開放するなど、地域とのつながりを大切にしていると感じられる建物を増やしましょう。

重点取組

仮想マンション町内会の活動（交流のためのイベント等）を具体的に進めましょう。